“当たり前”なんかじゃない

　私には５歳の息子と２歳の娘がいます。
今回は、娘を出産したときの事を振り返ってお話しさせて頂きます。

　２人目だったということもあり、お産の進みが早かったのか病院に着いてから１時間かからずに娘の出産となりました。
　出産翌日から少し咳が出始めましたが、『ちょっと風邪っぽいのかな』とあまり気にすることなく入院期間を過ごしていました。時々咳は出ており血圧は少し高めでしたが、それ以外に目立った不調はなかったので、何かあれば連絡するということで、産後５日目に娘と退院。

　自宅に帰ってからも咳は続いていて、次第に息切れもするように…
呼吸が苦しくなり、夜間救急を受診し翌日朝から入院。
そして、いろいろな検査をした後に伝えられた診断名は“周産期心筋症”。
　症例が少ない病気で、現段階だと退院の目途はたてられないと医師から告げられました。
行動制限もかかり病室内しか動けず、不安過ぎてネットで調べると亡くなる可能性まである病気…
産後でメンタルが不安定な状況で入院、息子・娘と離れ離れになり、ずっと涙が止まりませんでした。

　“もしもこのまま退院できなかったらどうしよう…”
　“もしもこのまま死んでしまったら、娘は私の存在を知らずに育っていくのかな…”

そんなことを考えたら、先の見えない不安に押しつぶされそうでした。
　夫が書いた園のおたよりに、『ママがいないのが寂しいようで、夜はベットにぬいぐるみをたくさん持ってきて眠っていました』という文章を見て、涙が止まらずにベットの中で泣き続けました。
　その後も必要な検査を受け、治療をしながら退院できる日を待ち続け、２週間経ってやっと退院することができました。ようやく待ちわびていた家族揃っての生活が送れるようになりました。

　保育士という職業に就いていても、自分の子育てでは苦戦することもたくさんあります。
フルタイム勤務で気持ちに余裕がなく、自分の子どもに優しい言葉をかけられない時もあります。
（お腹にいた時は、無事に生まれてくることだけを願っていたのに…）
でもそんな時、いつも自分が思い返すようにしていることは、離れ離れになったあの時の気持ちです。

今、子どもたちと一緒に生活できていることは“当たり前”なんかじゃない
今、こうして仕事も子育てもできているのは“当たり前”なんかじゃない

『ぼく、ママだいすき！』と真っ直ぐに愛を伝えてくれる息子。
抱っこしてほしいと両手を伸ばし、抱きかかえられると満足そうな顔をする娘。
一緒に過ごせることに感謝して、一日一日を大切にしていきたいと思います。

（池之座）